**良きサマリア人はどこに？　2016 07 10**

**ルカ10:25-37 Carl Zimmermann 牧師**

10年ほど前、ニューヨーク市の建設現場労働者、ウェスリー・オートリーは、地下鉄ホームに立っていた。　するとある男性が発作を起こして線路に落ちてしまった。　それに気づいたオートリーは、電車が近づいていたが、すぐに線路に飛び降り、彼を引き上げる余裕はなかったので、覆いかぶさって、引かれるのを防いだ。　電車は彼等の上を走って行ったが、なんと二人ともすり傷一つさえ負わなかった。　瞬く間に、オートリーは世界的なヒーローとなり、ニュースの見出しには、「良きサマリア人が線路上の男を救った」と書き立てられた。

ウェスリー・オートリーのしたことは注目すべきであり、わたしたちが似たような境遇にあったら、どう行動するだろうかと考えさせる。　我々は、命と体に危険を冒してまでも、線路に飛び込めるだろうか、あるいは恐れとためらいのなかで、行動できずにいるだろうか？　なにもできない傍観者となるか、勇敢な良きサマリア人となるだろうか？

本日の福音書は、よく知られ、愛されている良きサマリア人の話である。　放蕩息子とならんで、たぶんわたしたちは、忠実に聖書の話に沿って話すことができると思う。　しかし、この話の中で、イエスが我々に、一連の難問を問いかけている。

週報には、"Tell Me Why(なぜか教えて)"という本のシリーズのなかから、質問のリストが入っている。　これらは、わたしたちの生活の中で、なぜだろうと考える、小さな質問の数々が挙がっている。　しかし、われわれが聖書と呼んでいる、もう一冊の本には、さらに難しい質問がたくさんつまっている。　たとえば、ルカ福音書だけでも、人々はイエスに、以下のようなさまざまな質問をしている。

いったい誰が救われるのか？　なぜ徴税人や罪人たちと食事をするのか？　いったい誰の権限によってそのようなことをするのか？

そして、良きサマリア人の話のなかでは、昔「６万４千ドルの質問」というテレビ番組があったが、それと似たような、考えさせる質問が次々と出てくる。

ルカは、律法学者が立ち上がってイエスを試すところから話をはじめている。　読者はまず律法学者の動機を知りたくなる。　いったいイエスに恥ずかしい思いをさせようとしているのか、それとも、イエスが本物かどうかを判定しようとしているのか？

主イエスの話を聴いた人々は、イエスがまちがいなく天才であり、またおそらく、救い主だろうと信じた。　しかし、律法学者は、彼は謝肉祭の見世物に登場する行商人ではないかとも考えた。　それゆえ、律法学者は獲物の最大の弱点を突くように、イエスに質問する。

「先生、永遠の命を得るために何をしなければなりませんか？」

ここで、律法学者は何を信じなければならないかではなく、何をしなければならないかと質問していることに、注意して欲しい。　キリスト教の伝統では、信じることがすべてであるが、古代世界では、何を行なうかに重きがおかれている。

「永遠の命を得るために、何をしなければならないか？」

これはとても重大な質問であり、みなさんも自問自答したことがあるのではないかと思う。　神の側につくには、何をしなければならないか？　神の加護を得るには、いったい何を成し遂げねばならないかと。。。　天国への真珠の門を通るためには、いったい何人の人を助け、愛し、慰め、食べさせ、家に泊め、赦さなければならないかと。

ここで、イエスはもちろん答をわかっていた。　しかし、律法学者に答を言って終わりにしてしまうのではなく、イエスは彼に質問をした。　「律法の書には、いったい何と書いてあるのか？つまりモーセ五書には何と書いてあるのか？」

コメディアンのウッディアレンは、かつて、一人のラビ(ユダヤ教指導者)に質問した、「なぜラビは質問に対して質問で答えるのですか？」するとその彼は一分ほど考えたのち、「なぜラビは質問に対して質問で答えてはならないのか？」と答えた。

さて、イエスと律法学者の応戦のほこ先は、その向きが逆になった。今度は律法学者が試され、すぐに、彼の頭がぐるぐると働きだしている。

彼はモーセ五書の中身から答えを探し始めた。そして確かに答えはあるのだが、「創世記や出エジプト記ではない、もちろん民数記でもない。　そうだ、レビ記と申命記だ！　二つの節をまとめれば良いのだ。　あなたの神である主を愛し、隣人を自分のように愛しなさい。」

イエスは微笑んだ。　「その通り、そのようにすれば、あなたは生きられる。」

そして、そこで話は終わってもよかったが、しかし、律法学者にとってもわたしたちにとっても、話はそれで終わりではなかった。なぜなら、もっと知りたかった、いや、ほこ先を今度はイエスに向けたかったから。　そして、律法学者は質問した：「いったいだれがわたしの隣人なのですか？」

律法学者もわたしたちをも、信仰のさらに深い部分に招きながら、イエスは、良きサマリア人の話をされる。

ユダヤ人のある旅人が、エリコの町に向かう途中、何人かの盗賊が彼を襲い、持ち物を奪い、人通りの多い幹線道の道端に半殺し状態にして逃げ去った。

たまたま、聖職者である司祭が同じ道を通りかかり、キリスト信者たちは、ハッピーエンドを期待した。　もちろん、神の人である司祭は立ち止まって、打ちひしがれたユダヤ人を助けるかのごとくに思えたが、それをしなかった。

なぜ、そのようなことにはならずに、司祭は横を通り過ぎたか。もし、司祭はその男が殺されてしまっていたとするなら、律法によって司祭は、汚れたものに触れてはならなかったからである。　もし、旅人が襲われても、息の根があったとするなら、司祭は単にそのような事態に巻き込まれたくなく、また新たに洗濯したばかりの司祭の礼服を泥や血で汚したくなかったのだろう。

そして、こんどはレビ人が来たが、その場からすぐに逃げていってしまった。

司祭もレビ人も律法をよく知っており、その意味するところは明白であった。　もしだれかが何かを必要としていたなら、立ち止まり、助けるのである。

しかし、ここでイエスは衝撃的で新たな一幕を追加している。　普通のユダヤ人が一人やってきて、適切なことをするのではなく、イエスは、サマリア人を勇敢なヒーローとすることで、だれをも深遠なる水底から救い出すかのごとくに、非常に驚かせている。

それは聴いている人々が、理解しがたいような話なのである。　なぜなら、ユダヤ人とサマリア人は、ひどく嫌っていたのである。サマリア人たちは、ユダヤの伝統を引き継いでいるといいながらも、エルサレムの神殿ではともに礼拝を守ることはしていなかった。　サマリア人たちは、神を信じるといっても、正統的なユダヤ人が信じるように信じているわけではなかった。　サマリア人は、非正統的なところから来たものとされていた。　ユダヤ人からは相手にもされない、追放の民であり、全く尊敬などされていなかったのである。

しかし、イエスは、良きサマリア人の物語の絵の中に、サマリア人がユダヤ人と共に苦しむという共感の筆を加えている。　サマリア人が、襲われて血だらけとなった人の横に来たとき、その半殺し状態の人が、ユダヤ人であろうが、サマリア人であろうが、南アメリカの人であろうが、エスキモーであろうが、どうでも良いのである。どこで礼拝をしていようが、どんな聖書を読んでいようが、どんな食べ物を食べていようが、あるいはどんなフットボールチームのファンであるかなどは、どうでもよいのである。その男性が、待ったなしの助けを必要としている人であることだけわかれば良いのだ。どんな成り行きだろうが、失敗に終わってしまうかもしれなくても、直感的に正しいことをするのである。

そして、イエスは最後の質問を律法学者にしている。「三人の中で、つまり、司祭か、レビ人か、サマリア人の中で、いったいだれが盗賊に襲われた男の隣人となったのか？」

そして、ただ一つの正しい行動が示されたように、唯一の正しき答えしか律法学者は答えられなかった、「隣人になったのは、憐れみを示した者です。」

「正しい答えだ」とイエスは言い、さらに「さあ、行って同じことをしなさい。」と話された。

おわかりだろうか、他人にどう対応するか、他人のために何をするかという話になった時、わたしたちは何を信じるかが問題ではなく、何をするか、そして、憐れみを示すことが大切なのである、なぜなら、それのみが、正しい行いだからである。　アーメン